

戦闘の前に装束・馬・馬具などを示す『平家物語』のパターンに注目しよう。

忠度……紺地の錦の直垂に黒糸威の鎧着て、黒馬の太うたくましきに、沃懸地の鞍置いて乗り給へり。

敦盛……練貫に鶴めうたる直垂に、萌黄匂の鎧着て、鍬形うつたる甲の緒しめ、こがねづくりの太刀をはき、切斑の矢負ひ、滋藤の弓もつて、連銭華毛なる馬に金覆輪の鞍おいて乗つたる武者一騎、

音便が多用されていることに注目しよう。

イ音便

憎き

憎い奴かな。

ウ音便

太く

黒馬の太うたくましきに、

撥音便

む

頸をかかんとし給ふとむらじ、

促音便

取り

取つて押さへて、

敬語の用いられ方に注目しよう。

尊敬・補助動詞・作者から忠度への敬意

(忠度が) 控へ控へ落ち給ふを、

謙讓・本動詞・作者から忠度への敬意

(六野太が) 鞭あぶみを合はせて追つき奉り、

(六野太が忠度に向かつて)

尊敬・本動詞・六野太から忠度への敬意

抑いかなる人でおはしまし

丁寧・補助動詞・六野太から忠度への敬意

候ふぞ、

尊敬・助動詞 尊敬・補助動詞・六野太から忠度への敬意

名のらせ 給へ

「せ給へ」のように尊敬を表す語が重複する表現を「二重尊敬」という。この表現は、帝・后・皇太子など、最高位にある人物に対してしか用いられないので、「最高敬語」とも言われる。ただ、会話文においてはそれ以外の人物に対しても用いられており、ここはその一例にあたる。